

2019 年度附属校英語科授業研究会〈技の習得〉

附属校教育研究・研修センター

2020 年 1 月 25 日（土）、朱雀 B01 会議室において、香里ヌヴェール学院小学校校長の西山哲郎先生をお招きし、2019 年度附属校英語科授業研究会〈技の習得〉を開催した。テーマは「子どもたちの未来を本気で考える PBL とバイリンガル教育」であった。出席者は宇治 3 人、小学校 2 人、平安女学院 1 人、立命館大学 1 人、一貫 1 人の計 8 人であった。

〈研修会の概要〉

中国や韓国などの近隣諸国に比べても分かるように、日本の中高校生の英語力はきわめて低く、日本の英語教育は世界的に遅れていると言われていています。小学校で英語が科目化されたことで、小学校での英語教育も注目されていますが、小学生に対して英語の楽しさを伝え、満足いく授業ができる英語力を有している人材は決して多くありません。さらに、海外留学する日本人学生が減少していること、英語教師を目指して教職課程を履修する大学生も全体的に減っていることなどから、日本の英語教育はあまり良い状態であるとは言えません。では、日本の子どもたちが英語を好きになるにはどうすれば良いのでしょうか？海外のバイリンガル教育からヒントを得て、日本の学校での英語教育を変えていくことで日本の子ども達も大きく変わっていくことが期待できるでしょう。

高い英語力を持つフィンランドの学生が受ける英語教育は、日本の英語教育とはかなり状況が違っています。まず、フィンランドの英語教員の多くが大学院を卒業しており、高度な専門性と技術を持った人が授業を行っています。また、生徒のレベルに適した教材が開発提供され、1 時間の授業が緻密に設計されています。上位層も中位層も下位層も満足できる活動が教科書やワークブック内にあり、かなりのボリュームがあるのですが、きちんと家庭学習ができる風土があるので、宿題も結構な量出されるそうです。その結果、フィンランドの学生は限られた授業時間内でも豊富な語彙や文法を操り、自由に外国語を使いこなすことができるようになります。

日本人の多くが英語を苦手とする主な理由に、リスニングの難しさ、不十分な語彙力と文法、そして全体的に英語に触れる機会が少ない事などが挙げられます。よくリスニングは耳が重要だと言われますが、自分が発音できない単語は聞き取ることもできません。リスニング力を上げるには音の強弱、リズム、音節の調節の練習を徹底しなければならないのです。単語については、中級レベルといわれる単語を学校で学ぶことが多い一方、日常生活で頻繁に使われる生活単語や、4 歳から 5 歳の子どもの絵本に出てくるような初級の単語学習が疎かにされており、中途半端な単語学習に終わってしまうことがあります。文法に関しては、時制や冠詞への無関心、代名詞を用いずに名詞を無意味に繰り返す傾向があります。そして、授業で英語に触れる量が全体的に少なすぎるのが致命的な問題のひとつと言えるでしょう。つまり、教育は偏差値ではなく、経験値が最も重要なのです。

英語に触れる機会を増やすための方法の 1 つとして取り組まれているのが、多読です。日本の中高生の大半は授業内で教科書に載っているほんの少しの文章しか読まされません。それなのに宿題などで膨大な量のリーディング課題が課されることもしばしば。授業で少しのリーディングしかしてこなかった学生達は、長めの文章を読むのに強い抵抗を感じてしまうのです。そうならないためにも、学生のレベルに合わせて徐々にリーディングのレベルを上げていながら計画的に多読を取り入れるべきです。多読を授業に取り入れる際には、必ず生徒自身に読みたい本や教材を選ばせる、英語をできるだけ英語で理解する、難しいと感じたら本を変更する、集中力を維持するために教師が積極的に生徒に話しかけるなどの考慮が必要です。すると、生徒は確実に実力が伸びていくのを実感することができるようになり、積極的に自分の意見を発信していくよう

になっていきます。多読の効果はとて大きく、アウトプットにも繋がります。News Journal という課題は様々なスキルを向上させるために有効なのですが、中学生の頃からの多読が下支えとなっています。この課題では自分の好きな新聞記事を選び、自ら語彙を調べ、内容を要約し、考えを英語で発信します。多読、新聞記事、動画などの生素材に慣れると、学び方が変わり、世界基準で英語の授業を組み立てることが出来ます。さらに授業内ディベートも行えるようになり、英語ディベートが好きになった教え子たちは国際ディベート大会で強豪校を相手に次々と勝ち進んでいくまでに成長していきました。

海外の教育を日本に取り入れると、当然日本の親、生徒、同僚達からよく批判されます。文法・訳読にとらわれない教育で、成績評価はどうするのか、入試に対応できるのかと。しかし、実際に海外で行われているバイリンガル教育を日本でも行ってみると、成績が下がるどころか、模試や英検で好成績を取るようになり、海外の大学への進学・留学を目指す人も増えました。

中高生は学習環境さえ整えてあげれば自発的に学んでいきますし、どんどん成長していきます。インターネットが自由自在に使える今では、自分の好きな場所からオンラインで誰とでも英会話をすることが出来ます。中高生の間に豊かな言語材料に触れ、実践していく経験を経た学生は、海外留学や国際的な活動に参加するとき戸惑いなく、また楽しんで学ぶようになります。

教育を変えれば子ども達は変わっていきます。ただ、難しいのは大人を変えていくことです。学校現場に入ると、従来の文法・訳読法を続けて行うべきだという意見を持った人達からすると人達に足を引っ張られる事がよくあります。それでも自分の信念を大切に新しいことを取り入れていく事が今の日本の教育には必要なことです。日本の学生が将来的には国際的ステージで活躍できるように成長させていくことが新しい英語教育の目標です。

Q&A

Q：小学校での PBL を行う上でのアドバイスはあるか？

A：教師自身が PBL の教育を受けていないため、どうやれば良いのか教師自身に分からない事が多い。「対話」が大事とは言いが、年功序列が慣習となっている日本の文化の中で、教師と生徒、生徒同士のフラットな関係性を PBL 授業でどう保証できるかが成功の鍵のひとつだと言える。どのように行えば良いのかについてははっきりとしたフレームワークはなく、PBL を進めていく中で、脱線することや予想だにしない子どもたちの発想を許容する教員の度量も大切な要素だと思う。成績や学力に PBL が繋がることははっきりしているが、旧来型の授業デザインのように検定などといった分かりやすい指標がないので、大人が PBL のコンセプトを深く理解して、子どもたちの学び合いを見守ることができるかも重要。

Q：PBL も教科の枠組みがないと続けていくのが難しい。その枠組みをどうしているのか。

A：香里ヌヴェール学院では、全ての教科で PBL を取り入れようと、試行錯誤を繰り返している。上述したが、教員自体が PBL で育っていないので、教育観を 180 度変えるくらい大きな経験やショック療法といえるくらいの研修を実施しないといけないし、頻繁に公開授業や研究授業を校内で実施し、刺激し合える雰囲気を作ることに腐心している。

Q：L1 と L2 どちらがより強い言語なのかが曖昧な子どもにはどうしていくべきか？

A：国語教育の改革が必要。英語だけやっていると、国語ができなくなってしまうと言う議論がされている。小学校でも古い国語教育が行われている。両方伸ばせるような教育をしていく必要がある。

《記録 立命館大学文学部国際コミュニケーション専攻 織田佳那》

《編集 附属校教育研究・研修センター 今宿純男》